神学校だより

JAPAN BAPTIST BIBLE COLLEGE
日本バプテスト聖書神学校

CONTENTS 1

校長の机から　石川 実

恩師
足立先生を偲んで　上田 晃
鈴木 恵輔

第 58 回卒業生の証しと
卒論要約
片山 大輔
鈴木 しのぶ
宮崎 靖章

新入学生の証し
井垣 勇基
石川 高嶺
堀口 和基
澤 みのり
堺 希望
西牟田恵理也
藤田 真穂

CONTENTS 2

新年度にあたって
2 年　市村 雄治
鹿毛 喜悦
齋藤 光彦
松田 綾乃
3 年　香川 盛治
恋田 寛正
4 年　香川 尚徳
藤沢 幸人

神学校 2016 年度報告
神学校 2017 年度予定

あなたがたは、『刈り入れ時が来るまでに、まだ四か月ある』と言ってはいませんか。
さあ、わたしの言うことを聞きなさい。目を上げて畑を見なさい。
色づいて、刈り入れるばかりになっています。
ヨハネの福音書4:35

SEPTMBER 2017 VOL.74

校長の机から

神学生が身につけたいこと

校長　石川　実

「自分自身にも、教える事にも、よく気をつけなさい。あくまでそれを続けなさい。そうすれば、自分自身をも、またあなたの教えを聞く人たちをも救うことになります。」

第一テモテ４：１６

私たちの神学校は、バイブル・バプテスト・フェローシップの共同事業です。その目的の第一は、主イエス様の救いのご計画の実現のために、ひたすら働く伝道者を養成することです。そのために、冒頭のお言葉では、①自分自身によく気をつけなさい②教える事によく気をつけなさいと言われています。

神学校は神学を学ぶところですから、②教えることについてはいうまでもないでしょう。しかし、その前に①がなされていなければ、「知識は人を高ぶらせ」（第一コリント８：１）となり、「高慢になって、悪魔と同じさばきを受ける」（第一テモテ３：６）という危険もあります。そのようなことになれば神学校に来ない方がよかったとも言えます。

創世記のヨセフは、イスラエルの家のいのちの救いのために、神によって遣わされました。（創世記４５：５）私たちは良い結果をすぐに見たくなりますが、ヨセフの話には、そこに至るまでの過程があります。「彼らは足かせで、ヨセフの足を悩まし、ヨセフは鉄のかせの中に入った。彼のことばがそのとおりになる時まで、主のことばは彼をためした。」詩篇１０５：１８，１９

実際にヨセフは拘留されました。「侍従長はヨセフを彼らの付き人にしたので、彼はその世話をした。こうして彼らは、しばらく拘留されていた。」（創世記４０：４）それは、リーダーシップをとる前に、付き人として、仕えること、しもべの心を学ばなければならないからでした。

ヨセフは彼ら（献酌官長と調理官長）の付き人となったことで、彼らが見た夢の解明かしを神の霊によってしました。そして、献酌官長が釈放されたおりには、自分のことをパロに話して、出られるようにしてほしいと頼んでいました。ところが現実は、「ところが献酌官長はヨセフのことを思い出さず、彼のことを忘れてしまった。」（同２３節）しかも続くお言葉は、「それから二年の後」（創世記４１：１）とあります。人生は思い通りにならないものです。ヨセフ自身も「わたしは投獄されるようなことは何もしていないのです」（同１５節）と言いました。ですが、このことも神がご支配されていることであり、後になって、ヨセフにも必要であったことが分かったでしょう。

神学校に入る前に、数年待たされた方もいるでしょう。また、すぐにでも伝道師や宣教師として働きたいのにと熱心な方もおられるでしょう。ですが、単に熱心なことが必ずしもいいことではないと言われています。「私は、彼らが神に対して熱心であることをあかします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。」ローマ１０：２　お言葉に基づく熱心さでなければなりません。

私たちの神学校は全寮制です。もしかすると、ヨセフにとっての投獄のような役割もあるかも知れません。どんなことにも不平不満をいわずに、忍耐をもって、神から与えられたレッスンとして全うしていただきたいものです。

恩師
足立 茂先生を
偲んで

今年１月に、神学校の元校長のお一人であられた足立茂先生が召天されました。

先生は 2006 年から 2012 年まで校長職を担ってくださいました。神学校教育における逸材が取り去られ、改めて地上の営みの意味を考えさせられます。

「偶然ということはない。すべては神様のご主権である」と、恩師は繰り返し学生たちに語られていたことを思い起こします。

ここに、お二人の先生方から思い出を寄せていただきました。

故足立茂牧師を思う

上田 晃
名古屋BBC国内宣教師　神学校教師

私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。

もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。

ですから生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。

キリストは、死んだ人にとっても、生きている人にとっても、その主となるために、死んで、また生きられたのです。

ローマ書１４章７節～９節

足立茂先生を語ることは難しいです。なぜなら魂の深いところで神のみが知っておられる茂先生の信仰に基づく信念とも理念とも言う賜物を隠し持っておられた方と思うからです。ことばを大切にされる寡黙の人で、ことばの人ではありませんでした。それだけに先生の一言一言のことばに重みがあり、短いことばで、人の心を変える力がありました。熟慮してことばを選びながら、祈りの時も、教鞭をとられるときも、説教も驚かされるばかりの知恵がありました。聖書のお言葉を尊び、神のお言葉のとりつぎを畏れを持って為されておりました。神学校を卒業後も、牧会と宣教の働きをしながら某神学校の研究生として１０年にわたって聖書の研究と神学、幅広い教会の歴史を学び続けておられました。

また福音を伝えるためには、時代の変化を敏感に察知していなければならないことを、有志による憲法研究会の席上で話しておられました。素晴らしい牧師であり教師であると共に学びの人でした。

私たち初期の時代は、三年課程修了で神学校を卒業し伝道地に遣わされましたが、通信課程による四年課程が新設されました。私は早速、四年課程受講の申し込みをいたしました。担当教師は、足立茂先生と三澤先生でした。茂先生は神学部門を担当されて、通信生に参考資料となる本を紹介され、その本を熟読して課題に添った論文を提出しなければなりませんでした。論文を仕上げて送りますと、丁寧に、赤ペンで

指導を下さり、論文が送り返されるのです。

学ぼうとする者に愛を注いで、全身全霊で向き合ってくださったことに頭が下がりました。

私には及びもつかないことで、教えることの姿勢を学びました。三年がかりで、四年課程を修了することが出来ました。今でも、足立先生が、個人のために論文のやりとりを下さったことに深い感動と感謝があります。校長職を引き受けられたときは、あくまでも教会の承認が必要であり、軽々とは返事が出来ないと、すぐには快諾されませんでした。

先生の元で神学校の働きをさせていただく中で、よく私に意見を求められました。私は「先生はどう考えておられるのですか。」と逆にお考えを聞きたいと思うことがありました。そのときはお応えにはならず、私の考えを求められました。謙遜な先生の人柄を見た思いでした。時折、私の考えを採用してくださったときは、嬉しく思いました。外交辞令でお尋ねになられたのではなく、本意からお尋ね下さったことがよく分かり恐縮しました。

先生は忍耐と責任感の強い方であることが分かりました。あの病気を発病される以前から既に重い病気と共生しておられ、教師の時から不自由さの中で、静岡から毎週軽井沢に通っておられたことを知りました。病気を発症された時、大変な症状と闘いながらも、悲壮感を悟らせず、校長の任期を全うされたのには頭が下がりました。先生の内には、もう一期、校長としての責任を果たしたい願いさえありました。主の御前に、無念であられたことは伝わりました。

茂先生が好んで、使われたことばを紹介します。「イエスキリストは教会の大牧者、牧師は教会に仕える神の僕。」「神の召しと賜物は変わらない。」「聖書は神のお言葉。」「神の御主権と人の責任。」「ただ主のみが讃えられなければならない。」「すべては只主の栄光が顕されるために。」「キリストは教会の頭、教会は主の御からだ。」「学びは目的ではない。宣教と牧会こそ学びの目的。」時にはまじめな顔で冗句も言われ、隠れた一面を見せられることもありました。天に召されるその瞬間まで、主イエスキリストを愛し、主に祈り、みことばに聞き、委子夫人との二人だけの礼拝を何よりも楽しみにしておられたように私には見えました。

私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。

あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。

聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。

私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中にはいり込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。

あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。

ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。

いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。

みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあって御国を継がせることができるのです。

使徒の働き２０章２７節～３２節

「病床を訪ねての交わり」

私は時折しか祈ってはいなかったのに、病床を訪ねたとき「先生、お祈りしています。」と伝えたのです。先生の目は、私の欺瞞を見透かし

ておられることが分かりました。先生は、私をじっと見て、「私はいつもベッドから主を仰いで祈らせていただいております。」と語っておられることを読み取りました。先生はいつも祈ってくださっていることを知らされ、「祈っています。」と申し上げた自分が恥ずかしくなり、「祈っている。」という心のおごりを示された思いで悔い改めさせられました。

先生は身動きも出来ない状態の中で、内住の御霊によって祈り、イエス様との交わりを、祈りを通して楽しんでおられるご様子で、いつお邪魔しても、平安な眼差しで、私をじっと見つめてくださり、時折瞬きで、私の話しかけに応えてくださいました。

声で話すことはお出来にはならなくても、十分な疎通がありました。先生の、無言の眼差しから、私の心の隅々まで照らし見ておられる清いイエスさまの眼差しを感じ取りました。

良心の痛みを覚え、視線をそらした時もありました。時には優しく、暖かい愛の眼差しでした。

委子先生が、教会のこと、兄弟姉妹のご様子など、細やかに、茂先生に話しかけ、報告される様子を傍で聞いていて、素晴らしいご夫婦の愛と信頼の絆を見ました。瞬きをされ、涙も流されることもありました。おそらく内面においては、大きな苦痛と不自由さとの闘いもあられたとお察ししてはおりましたが、忍耐強さにはただただ頭が下がりました。意識があられた期間の闘病においては、キリストの悩みの忍耐を共有しておられたと思いました。もし自分だったならどこまで耐えられるか？私は自問自答を繰り返しておりました。

「ただ神の栄光のみ」

私は以前、静岡教会を訪問したことがありました。教会の場所が分からず、住所を頼りに歩いておりました。すると、どこからともなくエレクトーンの美しい調べが聞こえてきたのです。それは聖歌の曲でした。調べを頼りに教会に辿り着くことが出来たのです。弾いておられたのは、足立茂先生でした。顔は、主を賛美する喜びの笑顔で輝いておられました。茂先生と主にある交わりを持たせていただいた最初の出会いでした。今でもあの日の賛美の調べが心に残っています。

「僕はオランダに留学したいのです。」と、吐露されたことがありました。「環境と経済がゆるされないので、無理な夢ですが、スカラシップの様な制度があるといいのにね。」と話されたこともありました。お応えできなかったことが悔やまれます。先生の書斎には、英語やドイツ語などのキリスト教書を読破された書物が何冊もあると伺いました。先生は、真剣にオランダ留学を願っておられたのです。

今後、献身神学生や献身留学神学生のスカラシップやサポート制度などの財源が神学校に基金として確保されていくことを願っております。

鈴木 恵輔
セントラルＢＢＣ 牧師　神学校教師

足立校長先生が校長時代のことを、先生を偲び、思い出を振り返ってみたいと思います。

杉浦先生が宣教師の先生方の校長時代に続いて、初代の日本人校長先生になられたのが1985年。この時は、宣教師校長時代の最後のお働きを３期９年、ほぼ一週間全力当番されたキング先生が、「もう宣教師が校長を務める時は終わった。これからは日本人校長がふさわしい」と言われ、３０代の杉浦宏禧先生を指名され、総会の承認を得て校長に就任されたと伺っています。９年の校長時代の一番大きなお働きは学

びの充実と経済の赤字体制からの脱却ではなかったかと思います。

学びの充実の一つとして、若い、神学校を卒業して間もない献身者を教師または助教師として採用され、ご指導されたことが強く印象に残っています。また、校長職を支えられるお働きを、上山雄治先生と上田晃先生が阿吽の呼吸でなさっておられたのが印象的でした。３期９年を務められ、三澤隆男先生が校長先生になられた時に、その働きを支えられたのが、白根喜代志先生と足立茂先生であられたと思います。足立先生は教務のお働きを主になさっておられたのではないかと推察しています。三澤校長時代に続き、杉浦先生の第４期の校長時代が３年ありますが、その途中で体調を崩されました。このお働きの続きのように、足立先生が校長職に着かれた印象がありました。この時代には、教務と会計と総務という名称と働きが確立したようにも思います。この時代に見られた大きな学びの変革の一つに神学校の四年制への移行と卒業論文の内容の変革があったと思います。これまでの卒論の内容を改め、学生兄姉の負担軽減と卒論内容の充実を図る目的で結論の部分を中心とした構成で仕上げるという画期的なものでした。

足立先生の校長期間の後半は、病魔との戦いの日々でした。お一人で学校に来られなくなってから、賢夫人委子先生が身の回りのお世話をされて居られました。次代の神学校教育を見据えた、大切なお働きであったと感銘しております。もう少しご一緒に働かせていただいていたらと、後悔至極です。

第５８回卒業生の証しと卒論要約

2017年6月30日に、第58回卒業式が行われました。説教者はマイケル・バーゲット師（アガペーBBC牧師）でした。4年課程の3名の兄姉が卒業しました。

調布バプテスト・テンプル
片山（かたやま） 大輔（だいすけ）

「行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためである」

主の御名を賛美いたします。

神学校四年間の学びが、主の守りと諸教会の先生方と兄弟姉妹の祈りによって支えられましたことを、心から感謝します。私は二年間のワーカーズコースで入学しましたが、主の導きと先生方のご指導によって、四年コースに変更するように導かれました。また、主のあわれみと助けにより、家庭や経済も守られました。主の御名を褒め称えます。

神学校の四年間を振り返りますと、心に喜びと感謝があふれ、主に賛美をする時もありましたが、団体生活を通じての試練やストレスに苦しみ、主に祈る日々もありました。どんな時も変わらない先生方の愛と熱心なご指導により、困難なときも、学びに真剣に取り組み続けることができました。

神学校の学びはとても内容が深く、興味深く、貴重な学びでした。四年間では学び終えるどころか、ようやく学びのスタートラインに立ったことを知りました。また、語学の学びや伝道実習、教会での奉仕などに大きなプレッシャーの

中で、祈りと、主の助けがなければ、自分の力では決してこの神学校の学びを全うすることができないことをはっきりと知ることができました。

「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためである。」　ヨハネ 5:16

卒業にあたり、この献身の御言葉を再び主から頂いています。まだ、学びの足りない者ですが、先生方の後に続き、そして、なによりもイエス様に従い、主に選ばれたものとして、自分の言葉でなく、真理の御言葉をはっきりと、まだ救われていない人々にお伝えしたいと願っています。今後ともお祈りに覚えて頂けますと幸いです。

卒業論文　要約

片山 大輔

1．テーマ　「今は恵みの時」の意味

2．目的

「今は恵みの時」（Ⅱコリント 6:2）を主題とし、「恵み」と「時」、そして、「今は恵みの時」という御言葉の意味について明らかにする。

3．方法

ギリシャ語聖書と、ヘブル語聖書、セプタギンタの研究と先行研究をもとに聖書の「恵み」と「時」について考察する。そして、神学的意味についても明らかにし、「恵みの年」ルカの福音書 4:19 との関連性を考察する。

4．結論

Ⅱコリント 6:2 の「今は恵みの時」は、「今は受け入れられた時」という意味であり、十字架による罪人の贖いが、神に受け入れられた時である。

「恵みの時」Ⅱコリント 6:2 と、「恵みの年」ルカの福音書4:19の御言葉には関連性がある。

5．考察

＊　ヘブル語の「ラツォン」をギリシャ語の「デクトウ」と訳したのはパウロの使徒的解釈である。これを尊重し、Ⅱコリント 6:2 は「受け入れられた時」と翻訳するのが聖書的な解釈である。

＊　「受け入れられた時」とは、神が定められた時であり、罪人が十字架の贖いを通して、神によって受け入れられた時である。

＊　「恵みの年」はヨベルの年に関連しており、「神が受け入れた時」を示す。ルカ 4:19 もⅡコリント 6:2 も、キリストの十字架という尊い捧げものを、主が「受け入れられた」時である。

＊　カイロスは神によって定められた時間という意味であり、キリストが十字架にかかり、私たちの罪を贖って下さった時である。

「神学校を卒業して」

若葉聖書バプテスト教会
鈴木（すずき） しのぶ

４年間の学びと訓練を与えてくださった憐れみ深い主を褒めたたえ、心からの感謝をおささげします。私は凸凹が多く、整えられる必要が大きいので、主がこの期間を与えてくださったと信じています。まだまだ訓練が足りない中で覚えたことは、入学するよりも卒業する方が信仰が必要だということです。これまでビート板にしがみついて足をバタつかせていたとするなら、これからはビート板から手を放し、主に信

頼して、主から力をいただき、世の流れに逆らって、主だけを目指して泳ぎ続けたいと願っています。

４年間で主がくださった恵みは限りありませんが、１つは聖書のおことばがその通りだと知ったことです。ある時、私はまだ起こっていないことを非常に恐れました。与えられたおことばに頼ること決心し、平安と解決をいただきました。またある時、信仰によって始めたことを信仰により貫くことを教えられました。私の心の願いが主ご自身に変えられ、主に信頼する喜びを味わいました。２つ目は、信仰の友をいただいたことです。教えられていること、祈りの課題、主の恵み、自分の弱さを心置きなく分かち合う友が与えられました。３つ目は、先生方から多くを教えていただいたことです。授業、チャペル、生活の中でどの先生からも多くを教えていただきました。特にある独身の女性の先生は、大人になってから救われた私に欠けているクリスチャンの品格をもって良き模範となり、主にある姉妹となってくださいました。

たくさんの先生方や兄弟姉妹とキャンプや伝道実習、祈祷会を通して交わりをいただいたことは大きな祝福でした。フェローシップの諸教会と兄弟姉妹のお祈りとサポートに心から感謝いたします。何より、若葉 BBC の先生方、兄弟姉妹たちはこの４年間、祈りと交わりを通して共に泣き、共に喜んでくださいました。主が私を若葉 BBC の一部にしてくださったことを心から喜び、感謝しています。

卒業論文　要約

鈴木 しのぶ

題名：　「JBBF において独身女性宣教師を派遣する必要性」

研究の目的：　世界では多くの女性が既婚者も独身者も宣教師として派遣されてきた。独身女性宣教師を派遣する必要があるとすれば、それはだれのどのような必要か。本論文は、神の定められた秩序を覆そうと試みるものでは全くない。つまり、決して女性の牧師や説教者を認めようとするものではなく、決して女性が男性の上に立って支配することを認めるものではない。むしろ、神の定められた秩序に真心から従い、神を今以上に愛し、さらに神におささげすることを望み、私たちが更に神の憐れみと恵みに拠り頼む余地のある領域は何かを明らかにしようとする論文である。

研究の方法：　文献研究と独身女性宣教師への質問紙の回答による。

結論：　時間の融通が利き、自己を犠牲にする働きは独身女性宣教師の利点であるが、これは人間的観点からの利点である。独身女性宣教師の「弱さ」にこそ、主の力が完全に現れる。「弱さ」は、私たちの祈りを熱くさせる。独身女性宣教師の派遣は、更なる宣教師の派遣を促し、いわば宣教の起爆剤となる。

考察：　独身女性宣教師の派遣により、宣教の重荷が分かち合われ宣教が拡大する。JBBF で独身女性宣教師が話題にされ、召しを確信する者が起こされ、信仰の一致をもって派遣され、宣教に関わる兄弟姉妹を主が多く増し加えてくださるよう祈る。

「神学校を卒業して」

幕張聖書バプテスト教会
宮崎（みやざき） 靖章（やすあき）

この度神学校を卒業させて頂きました宮崎靖章です。

この様に卒業のご報告をさせていただけるのは、諸教会の皆様のお祈りと神様の祝福のおか

げです。４年間の尊いお祈りと捧げものを心から感謝致します。

多くの方に「４年間は長かったですか」と質問されましたが、本当にこの４年間はあっという間でした。それだけ充実した４年間だったのだと思います。

この文章は卒業して一週間も経っていない時に記しましたので、正直卒業して何がどう変化したのか、自分は今何をすれば良いのかまだ整理出来ておりませんが、少しずつ卒業生としての生活が整えられて、その歩みも地に足がついたものにされていくのだと思っております。今後の歩みも神様にお委ねして、今なすべき事を着実にこなしていけるよう力を注ぎ、全てが神様によって全うされる事を唯一の自分の喜びとしていきたいと思います。

今、私が今やりたい事は、神学校で学んだ事の復習と聖書にまつわる本を少しでも多く読んで知識や理解力の幅を広げていく事です。特に、旧約聖書、新約聖書それぞれの時代背景をよく理解できるように、聖書の考古学、中でもメソポタミヤやカナン、及びギリシャやローマの宗教観をしっかりと勉強したいと考えております。

ただ、それだけを学べば十分というわけではありませんので、神様の御心を正しくお取次ぎ出来る器として日々成長させていただけるよう神様に祈り続けてまいります。

また、今後は「先生」と呼んでいただける機会も増えるかと思いますが、先生とは『先』に『生』きている者としての責任を問われる存在であると自分に言い聞かせて、決しておごり高ぶったりする事なく、むしろ仕える者としての責任を肝に命じて相応しい奉仕を忠実にこなしていけるように、主にあって自分自身をよく見つめていきたいと思います。

今後いろいろな機会に皆様とお会いさせて頂くかと思いますが、その時はお手柔らかに宜しくお願い致します。

卒業論文　要約

宮崎 靖章

私は卒論で性的少数者と聖書の関係を考察しました。

過去にあまり取り上げられていない分野かもしれませんので難しい部分もありましたが、伝道において当事者との関わり方を考察する事を目的としました。

始めに聖書の中でこのテーマに関すると思われる事の考察、特に「人の創造」「男と女」「罪とは」「結婚とは」等を御言葉から確認しました。次に性的少数者の実態を把握する為に専門用語や人体の形成過程を確認し、更に性的少数者が誕生する原因を、現段階で最も信憑性があると考えられる説を取り上げて考察しました。

次に、性的少数者本人による自伝や様々な報告から、当事者の人生でどの様な苦難や葛藤、及び戦いがあるのか、卒論という限られた範囲ではありますがその実態の把握に最大限努めました。

また、聖書の中で同性愛に言及している箇所として取り上げられる事の多いローマ人への手紙１章２２～２７節を中心に記される事を、当時のローマに影響を与えたギリシャの文化や神話の世界観を探って、聖書が指摘しているのは何なのかを理解する為の考察を試みました。

結論として性的少数者も私達と同じ罪人である事に変わりはないので、積極的に関わりを持って悔い改めを勧め、お言葉に基づいた生活を勧める事が重要であるとまとめさせて頂きました。この問題は未だに続く偏見や差別の対象となっていますが、大切なのは常にアンテナを立てて聖書の愛に基づいて考え続ける事だと思います。

２０１７年９月４日に、第６３回入学式が行われました。新入学生の救いと献身の証を掲載いたします。

① 氏名 ② コース ③ 出身教会 ④ 奉仕教会

① 井垣（いがき） 勇基（ゆうき）
② ４年課程
③ 調布ＢＴ
④ 調布ＢＴ

救いの証し

私の両親は青年時代に調布教会で救われ、結婚に導かれました。それで私は生まれた時から、両親と共に教会に通っています。幼稚園時代は、教会付属のこひつじ幼児園で過ごしました。日曜学校や幼児園の礼拝で、聖書のお話を何度も聞いていました。しかし、イエス様をはっきりと信じたのは５歳の時でした。

小さい時の私はあまりいい子ではなく、度々、先生や両親に叱られていました。自分でも悪いことだとわかっていて、やめたいと思いながらも、やめられないことがたくさんありました。

ある日、突然ある情景が心に浮かんできました。両親や、友だちや、教会の先生たちが天国でイエス様との再会を喜んでいる場面でした。私はその輪の中に入ることができませんでした。彼らはイエス様と永遠に生き、私は地獄で永遠の苦しみを受け、彼らからも、そしてイエス様からも忘れられていくことを思ったとき、とても恐ろしくなりました。

恐れでいっぱいになった私は家の外へ飛び出していきました。その日は雨が降っていたのですが、雨に濡れても全くそれを感じないほどに

それを不思議に思った母が私を呼びに来て言いました。「どうしたの？早く家に入りなさい。」私は答えました。「いやだ。僕はこのまま雨に濡れて、熱を出して死ぬんだ。僕は悪い心を持っているから、もう生きたくないんだ。」

その日の夜、母が聖書に記されている通りに福音を語ってくれました。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者がひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」ヨハネの３：１６

そして私はイエス・キリストを自分の主として信じる決心をしました。その時、「生きていていいんだ。僕が死ななくていいようにイエス様はいのちを捨ててくださったんだ。」そのような、それまで感じたことのない喜びが与えられました。

献身の証し

私は５歳の時に救われ、８歳の時にバプテスマを受けました。９歳の時に幼馴染の友だちに会うために、香港に出かけました。両親の同伴がない旅行は、これが生まれて初めてでした。

帰りの飛行機の中で、２週間の思い出を振り返りながら、ふと感じました。「香港の人たちはイエス様のことを信じていない。このままではみんな地獄で滅ぼされてしまうんだ。」日本にも、香港にも、世界中にイエス様のことを知らないで、滅びに向かっている人たちがいるとわかった時、今までに感じたことのない悲しみでいっぱいになり、声を出して、泣きました。そして、自分自身をイエス様にお捧げしたいという思いが与えられて、献身の決心に導かれました。

それから１２年たった今年の３月に、東アジアの宣教地を訪問する機会が与えられました。そこは９９％がイスラム教徒で、クリスチャンはほとんどいない地域でした。そこの異教徒の

集会場を何軒も訪問し、そこで密かに働かれている宣教師たちと交わる恵みに預かりました。彼らは異口同音に「働き人が足りないので、働き人が与えられるように祈ってください」と話していました。

「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」マタイ９：37、38

帰国してから、ずっとこの御言葉が心に響いていました。そして働き人が起こされるように祈っていました。ところが、祈っているうちに主は私に宣教の召しの確信を与えてくださいました。

私は小学生の時に献身に導かれました。当時、まだ幼かった私はその本当の意味するところをよく理解していませんでした。しかしイエス様は、その小さな献身でさえも覚えていてくださって、宣教の働きに召し出してくださいました。何の役にも立たない、欠けだらけの者ですが、主の憐れみを頂いて、喜んで自分を捨てる働き人に変えられていきたいです。

① 石川（いしかわ） 高嶺（たかね）
② ４年課程
③ 千葉BBC
④ 千葉BBC

救いの証し

私は 29 年前に牧師の家庭に生まれたので、気が付いた時には教会で過ごす毎日でした。日曜日の礼拝に出席することは当然のことで、神様を礼拝することに何の違和感も無く育ちました。毎週、教会学校とその後に持たれる礼拝で講壇から語られるメッセージは、生まれた時から聞き続けた言葉です。聖書に書かれていることを疑ったこともありませんでしたので、イエス様を信じるとか、信じないというようなことは全く考えませんでした。そのような私に、神様は一つの機会を与えて下さったのです。

それは 2001 年３月に開催された JBBF のジュニアキャンプです。それまで何度かキャンプに参加する機会はありましたが、参加する思いが与えられなかったのです。そしてこのキャンプが最初で最後でした。ですから今考えると、ジュニアキャンプの参加は主の導きだったとしか思えません。しかもこのキャンプで、十字架の贖いの御言葉が特別に自分に語って下さっているのだとわかり、イエス様を救い主と信じ受け入れることが出来たのです。

『道を行く人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。「おお、神殿を打ちこわして３日で建てる人よ。十字架から降りて来て、自分を救ってみろ。」また、祭司長たちも同じように、律法学者たちといっしょになって、イエスをあざけって言った。「他人は救ったが、自分は救えない。キリスト、イスラエルの王さま。たった今、十字架から降りてもらおうか。われわれは、それを見たら信じるから。」また、イエスといっしょに十字架につけられた者たちもイエスをののしった。』（マルコ 15:29-32）

何の罪も無いイエス様が私の罪のためにこんなに苦しんで下さったのに、今まで無関心でいた自分に気づかされ、主の前に自分の罪を悔い改め、イエス様の十字架の贖いが自分のためであると受け入れる決心に導かれました。神様の一方的な恵みによって救われたことに感謝します。

献身の証し

牧師家庭で育った私は牧師として仕えていく厳しさを十分承知しているので、牧師にだけは絶対になるまいという思いで歩んでいました。しかし就活をする中で「一般企業で働くだけの一生ではないのでは？」という思いが与えられました。その後プログラマー・接客業・一般事務と様々な仕事を経験しましたが、今振り返ると全てが訓練でした。

現在は医療や介護保険の審査をする公的機関で務めています。ずっと働くつもりでしたが今年の3月、仕事仲間の派遣社員全員が急に更新不可と宣告されたのです。私は祈りました。「神様、私にできることは本当に小さなことです。でもヨナタンが道具持ちと一緒に2人だけで敵陣を制したように（Ⅰサムエル記 14:1-15）小さな存在でも神様に委ねて行動する時、御心であれば大きな結果を生むことを知っています。すべてを委ねます」そして上司に「このやり方に納得できません。どうにかならないでしょうか？場合によっては私も辞めさせて頂きます」と伝えました。結局人事の判断は変わらず私も辞めることになりました。しかし仕事後も仲間と連絡を取る中で、一生捨てられない程の存在だった趣味のパソコンから距離を置くことができたのです。仕事と趣味を失い献身を考えられるようになると、派遣社員が更新可能に変わりさらに私も8月一杯仕事を続けられることになりました。

こうして献身の道が示されましたが、御言葉を頂いていない事とこんなに信仰の薄い者ではダメだという思いが残りました。これに対してJBBF全国青年フェローシップキャンプ2日目のメッセージで、どんなに信仰の薄い者であっても神様は心を砕いて用いて下さると示され、次の御言葉が与えられました。『そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか。」』（マタイ14：31）神様は様々な経験を通して私を成長させ、献身に対して否定的な思いを和らげ、導いて下さったのです。

① 堀口（ほりぐち） 和基（かずき）
② 4年課程
③ 千葉BBC
⑤ 千葉BBC

救いの証し

私の両親はクリスチャンです。両親に連れられて、小さいころから教会で育ちました。毎週日曜日になると教会へ行き、日曜学校で先生の話を聞き、礼拝にも参加し、空いている時間には年齢が近い多くの友達と遊ぶ。そのような日曜日を過ごしていました。

教会に毎週行くのが普通となっていた私にとって決心が与えられたきっかけは、私が中学生の時だったと記憶しております。それは教会学校の時間ではなく、毎年夏に行われている京葉地区のCSキャンプの時でした。

キャンプに参加し始めた頃はまだ小学生だった私は、そこで行われる海水浴やスイカ割り、仁戸名教会主催のスポーツレクなどを目当てに毎年参加していました。聖書の話は毎週聞けるけれど、近隣教会の友達と遊べるのはキャンプしかない。そう考えた私は毎年のように遊ぶことしか考えず、聖書の話を聞いて神様の事を考えることは二の次になっていました。

しかし中学生になって参加したキャンプで聞

を聞きました。

「人は皆、罪を犯している。そして罪を犯した人は必ず死ななければならない」というメッセージを聞いた私は、とても怖くなりました。

なぜなら、今まで教会で「罪は犯していけない」ということはずっと聞いており、理解しているつもりでした。しかし「死」という言葉は直接聞いたことがなく、自分とは無関係だと思っていたからです。このことを通し、私も多くの罪を犯している罪人であることに気づかされました。

キャンプから帰ってきても「死」という言葉に恐れていた私に、一つの御言葉が与えられました。

『罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。』ローマ　6：23

この御言葉を通して、救い主であり罪のないイエス様が私の罪のために十字架にかかり、命を捨ててくださったことを心から信じる決心をすることができました。

献身の証し

大学四年生を迎えて進路を考えるようになった時は、祈りながら一年を過ごし、一般企業へ就職することに導かれました。

そして社会人の二年目を迎え、営業部に配属されることになりました。仕事をしていく中で、多くの壁にぶつかりました。考えて起こした行動が良くない方向に向かってしまったり、仕事をするのに重要となる同じ部署の方との連携が上手くいきませんでした。

上司とは何度も面談し、毎回のようにしっかりと考えて行動するようにと言われ、それでもまた上手くいかず、面談が始まる。このようなことが続きました。

そして面談をしていたある日、上司から一つの質問を受けました。テーマは「社会人としての目標は何か」ということでした。そして日曜日の朝、送迎の奉仕で子供達を迎えに行く車の中で、突然一つの御言葉が与えられたのです。

『こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。』　第Ⅰコリント 10：31

私の目標は神の栄光を現すことであり、私にとって神の栄光を現すことは社会人として働くことではなく、すべてを捧げた献身者として働くことが示されました。

しかし罪人である私は、上司が質問したのを忘れてしまっていることを機に、この導きは気のせいであると思うようになったのです。

しかし神様は再び導いて下さいました。次の日曜日の礼拝メッセージの時です。石川先生によってエゼキエル書の御言葉が語られました。御言葉は突然与えられるものであり、私たちはその与えられた御言葉を受け入れる。それによって大きな祝福を与えられるというメッセージでした。このメッセージを通して、先週与えられた御言葉は気のせいではなく、はっきりとした導きであると決心することが出来ました。

これからも全てを神様に委ね、神の栄光を現す者の一人として歩んでいきたいと思います。

① 澤（さわ）　みのり
② ４年課程
③ めぐみBBT
④ めぐみBBT

救いの証し

私は牧師の家庭で生まれ、母のお腹にいる時から教会へ行っていました。そんな私は、救われたのがいつなのか分からないし、どんなみことばが与えられて救いの決心に導かれたのかもわかりません。今もそうです。しかし今もはっきり言えることは、神様がひとりごのイエス様をこの地上におくってくださり、イエス様が私たちの身代わりとなって十字架にかかって死なれたこと、そして３日目によみがえられたことを、小さいながらに信じていました。そして、小さいながらに自分は救われているという確信がありました。その確信は今も変わることがありません。

そんな私に大きなターニングポイントがありました。それは中学２年生になる春に行われたジュニアキャンプでのことです。その頃の私は、教会には行かなくてはならないから、奉仕はやらなくてはならないからしているといった教会生活を送っていました。ずっと「愛？そんなの知ってる。愛されている？そんなの分かってる。」そんな思いでメッセージを聞いていました。しかし最終日に、キリストの愛を改めて示され、今までの教会生活を悔い改め、自分の救いを証するためバプテスマを受ける決心をし、その年の10月21日にバプテスマを受けました。

いつのまにか救われていた私は、この素晴らしいめぐみに気づいていませんでした。しかし今では日々みことばから救いの確信が強められ、感謝の気持ちで溢れています。天地を創造され、今も全てを動かしている神様が罪人の私を愛してくださっていること、そして全てを主に捧げて歩んでいる両親のもとに生まれたことを本当に感謝します。なぜ私が今までキリストから離れずにいれたのか。それは神様の大きすぎる愛から逃れることができなかったからだと思います。
ゼパニヤ３：17

献身の証し

私が献身に導かれたのは、高校３年生になる春に行われたジュニアキャンプです。奉仕は自分のやりたいときにやるのではなく、神様が使いたいときに使っていただくために自分が神様に近づかなければならないと学び、思い描いていた道が閉ざされ、ローマ12章１節のみことばが与えられ、献身の思いを頂きました。

その後、いつか神学校に行くんだろうなという軽い思いでいました。そんななか祈り、期待しつつ北海道で行われた青年キャンプに参加し、献身に導かれた時と同じみことばが与えられ、今までをみつめなおし祈ったとき、神学校の導きを頂きました。

その後、愛作師の召天という大きな試練がありました。このまま召しが消えてしまうのではないかと不安に思う日々でした。しかし神様から与えられた召しは決して変わることがなく、逆に確信が強められる日々でした。私が神学校の召しに導かれた時のキャンプのテーマ、私たちクリスチャンは神様のチームとして共に神様のために働くこと、そしてその働きのバトンを受け継ぎ後継者となるということが語られたの

を思い出し、そのとき私が決心に導かれたのは、愛作師からバトンを受け継ぐという意味だったのではないかと思いました。その時導きを頂いたことも、愛作師の召天も、その試練によって確信を得ることも全て神様のご計画のうちで、最善のときでした。

2017年のジュニアキャンプに参加しましたときには、エペソ２章８節のみことばが与えられ、苦しみの中から解放されるよう祈るのではなく、この苦しみの中でも語るべきことばが語られるように祈りなさいということばに励まされ、この先の不安や、悲しみで溢れていた心が平安で溢れました。

これからもどんなことがあっても主に信頼し全てをゆだね、生涯お仕えしていきたいです。
ローマ８章28節

① 堺（さかい） 希望（のぞむ）
② ４年課程
③ 滝山BBC
④ 滝山BBC

救いの証し

私が信仰告白に至ったのは小学一年の時ですが、救われた瞬間というものをよく覚えていません。

ですので、ここでは私が救いの確信を得た時のことを書かせて頂きます。

私は宣教師の家に産まれ十五歳まで台湾で育ちました。

当時は聖書、特に救いを出来事として信じてはいましたがそれが特別だとは思っていませんでした。

高校は九州へ。中学とのギャップに大きなショックを受けました。不道徳が当然に起き、教師は力で押さえつける。嫌な世界でした。

そんな中、友人が与えられます。真っすぐでやる気に溢れた好青年。彼の存在に大きく支えられていましたが、それでも心はすり減るように疲れ三年の始めには勉学などとても手につかない状態になっていました。

見かねた担任が、友人といつも会っていることが原因ではと指摘してきました。自分がわからなくなっていた私は鵜呑みにし距離を置きました。次第に関係はギクシャクし自分がさらに疲れたことに気づきました。謝ると、彼は気にしていないと言ってくれましたが私には拭い去れないわだかまりが残りました。以前のように自然でいられなくなっていたのです。

そこで私は、やっと罪びとである自分を自覚し、失望し、己の罪深さを知りました。傷心の末、受験をやめ東京に越し、私は一人、主と向き合う時間を与えられました。

そこで、私は弱くて神様の助けなしには生きていけないことを悟らされます。キリストの十字架だけが目に見えるこの世界で本当のいのちを与え、生きる意味を与えてくださる、と。

今私は、私のためにイエス・キリストが十字架にかかり死なれ、罪の罰を代わりに受けて下さったこと。三日後にイエス・キリストはよみがえられて、彼を信じる私もよみがえり、罪許されて天国へ行けることを確信しております。

「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。」ローマ4:25

献身の証し

私は誰にも言えなかった「辛さ」があり、言わずともその密度を伝えられる「本物」になることが夢でした。手段は表現にあると思い、声優の養成所に通いました。

去年四月、八年ぶりに台湾に帰りました。帰る一週間前から、通っていた小中一貫校の取り壊しが始まりました。私の人生で、その学校だけが居場所でした。壊された学校を目撃し日本に戻ってくると芝居ができなくなっていました。心の支えが消えたようで、徐々に日常生活までおかしくなりました。養成所では落ちこぼれになりました。自分の中の感覚的なポリシーや基準がなくなり、自分たる由縁がわからなくなりました。後にわかったのは、私の「本物」を目指す努力に目的も価値観も縛られて、自己実現の為に生きていました。これはその解放の為でした。

御言葉に触れる時だけは熱と主の御前にへりくだる想いが与えられました。その頃、変だけれど、どう変なのか説明できない教えがあり、まず自分自身が動かされないために御言葉を学ぶ必要を感じ祈り始めました。

今年三月、全国ジュニアキャンプに引率で参加した際、多くの先生方や神学生の方々に祈って頂く機会に預かり、帰ると消えていた心の中心が回復していました。今までは一人だったけれど、今は一人ではないと知ったのと、精神を超えた御霊の回復があったからです。

四月に召しの御言葉としてエゼキエル３４章が与えられました。牧者の働き（エゼ３４：１６a)、イエス様が体現者（エゼ３４：２３、ヨハネ１０：１１)、最後に人間（ペテロ）に委ねられたこと（ヨハネ２１：１７最後）を示されました。

ずっと握りしめていた傷。それを捧げた時、私は自分の為の道が終わり、器として主の道を歩むように導かれました。

主が私の傷を癒し、用いて下さった事を心から感謝致します。

① 西牟田恵理也（にしむたえりや）
② ４年課程
③ 亀岡BBC
④ 亀岡BBC

救いの証し

私は京都の亀岡というところで、牧師家庭の長男として育ちました。生まれた時から家族と教会に通い、毎日・毎週、神様の御言葉を聞いて育ちました。私の両親は 1988 年 7 月に京都府亀岡市にて開拓伝道を始めました。0 からの開拓伝道スタートでしたので、特に午後の集会には誰も集う人がおらず、父でもある牧師先生は、母と私、そして弟に対してだけメッセージをしている状態でした。母はすでに救われており、弟は生後７か月で言葉が分からなかったため、まだ救われておらず、かつ言葉がわかる私に向かって、牧師先生は毎週、イェス様の十字架と復活についてメッセージをされていました。私が救われたのは 1 歳 10 か月の時です。牧師先生は毎回のメッセージの中で、イェス様を受け入れるよう招かれていましたが、私は最初のうちは、はっきりと拒絶していました。しかし、８月の最後の日曜日に、ヨハネの黙示録 3：20 の「見よ、わたしは戸の外に立って、た

たいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう。」という聖書の御言葉を聞き、服からおなかを出し、「神様、僕の中に入ってきてください！」と言いました。そして、ローマ 10：9～10「すなわち、自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる。なぜなら、人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである。」にあるように、イェス様は私の、そしてみんなの罪を赦すために十字架にかかられたこと、また３日目に蘇られたことを信じ、神様を受け入れ、救われました。その後、1998 年３月にバプテスマを受け、亀岡聖書バプテスト教会の教会員となりました。現在まで、神様の恵みと導きにより、日々支えられながら生きていることを感謝いたします。

献身の証し

私は、実は小学生の時には献身の導きを神様から受けていたのですが、中学校、高校と進学し、周りの世界が広がるにつれて、だんだん、神様よりもほかのことを優先して過ごすようになりました。その頃、牧師である父によく言われていた聖句があります。ヨハネの黙示録3:15～16「わたしはあなたのわざを知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。このように、熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるいので、あなたを口から吐き出そう。」この聖句の通り、私は神様に対して熱くもなく、冷たくもない、生ぬるい存在になったまま、まさに教会に通うだけで 10 年以上を過ごし、大学生の時には、「僕は、絶対献身はしない。」と、言うまでになっていました。私は、神様に愛して頂きながら、神様を愛さない不忠実なクリスチャンでした。その頃の私は、招きの賛美を歌うことが苦手でした。聖歌５８２番に、・・・「①神の御子みこにますイエスのために罪を敵として立つは誰たれぞ②富の楽しみと 地の位に目もくれずイェスにつくは誰ぞ　すべてを捨てて 従いまつらん 」すべてを捨てて従したがいまつらんという言葉は私にはとても重いものでした。自分は、神様よりも、「富の楽しみ」や「地の位」を優先していたためです。神様に従っていないことを心の中では理解していたため、いつしか、私は招きの賛美を歌えなくなっていました。自分が献身しなくても、他の誰かがするだろう。私は一信徒として、神様に仕えればそれでよい。と言い聞かせながら日々を過ごしました。そのような状態で高校、そして大学を無事卒業し、社会人として約４年働きく中で、自分はこのまま社会人として生きていくことが一番いいことなのかと改めて考えるようになりました。そのような中で、昨年 2016 年５月、ゼイダン先生のメッセージをお聞きしました。メッセージの中で「あなたは、普通の生活を送りたいのですか？それとも神様とともに歩むスペシャル（特別）な生活を送りたいのですか？」という言葉が強く心に残りました。キャンプ後、もう一度神様としっかり話し合ってみよう、と、神様にみ言葉を与えてもらえるようと心に決め、お祈りの中で翌月の６月、献身についてはっきりとした御言葉が与えられました。マタイ 9:37～38「・・収穫は多いが、働き人が少ない。 だから、収穫の主に願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい」御言葉を通して、「自分がどのような生活を送りたいのか」では

なく、「神様は自分にどうすることを望んでおられるのか」を第一にしよう。神様が必要としてくださるなら、「他の誰かがやるだろう」ではなく、「自分が、神様のための収穫の働き人になろう」と神様に示して頂き、献身の決心をすることができました。これからの人生を神様にゆだねて、神様に信頼して、使わされる場所でお仕えしようと考えています。神様が私の歩みを導いてくださることを信じ、生涯仕えていきたいと思います。

① 藤田（ふじた） 夏穂（なつほ）
② ４年課程
③ 甲府BBC
④ 甲府BBC

救いの証し

私は、牧師家庭に生まれ、神様のことを“いつ”というのは分かりませんが子どもながらに信じていました。

２０１３年、私が大学２年生の時に、神様は私が一番失いたくないものを取られました。私は失望し、将来が見えなくなり次第に神様から離れていきました。祈ることも聖書を読むこともなくなり、礼拝は牧師の娘だから仕方なく出席し、礼拝以外ではこの世に合わせて生活していました。２０１５年の青年キャンプで主にある姉妹との交わりとイザヤ書５５：８～９を通していかに私が傲慢であったかを示され、再び神様に目を向けるようになりました。その年の夏に調布教会との合同ユースキャンプがありました。自分がいかにこの世に染まっていたかが示され、神様と共に歩むことが本来の姿であること、それが一番の幸せであることに気づき、今までの生活を変えたいと思いました。

そして同年１０月に、地獄についての話を聞きました。聞き終わったとたん、今までの自分の歩みが一気によみがえり、小さい頃から聞いていたみことばの数々が頭の中で一瞬のうちに再生されました。そのうちのみことばの一つが、イザヤ書４３：４「わたしの目にはあなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」でした。こんな私でさえも愛してくださる神様。想像もできないほどの神様の大きな大きな愛を感じたとき、自分がどれほど罪深い人間であるか、塵のように小さい私のことをどれほど神様が愛して下さっているかを知ることができました。その時に初めて、十字架の意味を自分のものとして受け取ることができました。

神様から離れ続けていた私を忍耐強く待ち続け、決して見放すことなく、少しずつ神様に立ち返るよう導いてくださった神様に、本当に感謝しています。今はクリスチャンとしてはまだまだですが、コロサイ人への手紙３：１０にあるように、ますます新しくされていくことを喜び、主と共に歩める恵みに心から感謝します。

献身の証し

私は、中学２年生になる前のジュニアキャンプで宣教師になる決心をしました。Ｉサムエル記１４章からヨナタンが神様に期待して、自分の進む道をゆだね、ペリシテ人に立ち向かっていったメッセージを通して、宣教師になるビジョンが与えられました。しかし献身の決心をしてからも、不誠実な私は試練や誘惑に遭うたびにどんどん神様から離れて行きました。

２０１５年、当時２１歳の私のうちに神様は大きく働いて下さり、同年１０月には心から主

に立ち返り、救いの喜びが与えられました。その時私は、この神様の愛を、救いを、多くの人に伝えたい、伝えなければならないという宣教への思いが強く与えられました。まだ救われていない人々を思った時、頭に浮かんだみことばがローマ人への手紙１０：１４“しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。”でした。全くその通りだと思い、改めて私は宣教師になる決心をしました。

それから１年間、神学校に向けての祈りが始まりました。職場から来年度の進退調査があり神学校はまだまだで、仕事ももう少し続けたいという思いから、神学校を先送りすることを考えました。しかし主のみこころを求めました。イザヤ書を読んでいくうちに、神様は不信仰な私を何度も力強く励まし、神学校に行くことがみこころであることを示されました。ピリピ人への手紙１：６、イザヤ書４１：１０のみことばによって神学校に行く決心ができました。

宣教師のビジョンが与えられて１０年、神様の前で決心したことを神様がここまで導いてくださっていることを主に感謝し、また祈りのサポートをしてくださっている諸教会の兄弟姉妹に感謝します。

Faith,Hope,and Love

新年度にあたって

４年課程２年
岐阜ＢＢＣ
市村（いちむら） 雄治（ゆうじ）

在校生の兄姉の新年度の抱負と祈りの課題を掲載します。共にお祈りくだされば幸いです。

あっと言う間に一年の学びが終わり、振り返るとあらゆる時と与えられた訓練の中に主の臨在と、みことばがあったことに気付かされます。守られた一年、授業で教えられた聖書の真理、神学は新たな発見と示しの連続で、主の偉大さとその言葉の内にある力を実感いたしました。また、それに加えて与えられた様々な経験の中から、何が起きても主の知られないことはなく、ただ主を信じて祈り続けることを教えられました。日々新しくされる喜びとともに、救霊の思い、献身の思いも日々深め、主と歩んでいきたいと願っています。今日までの恵みと守りを覚えつつ、新学期も主から与えられる力の中で最大限に学びを進めてまいります。

私たちのために、全国から捧げられる兄姉方の熱心な祈りがあることを心から感謝いたします。そして、新しい一年も主にある望みの中で学びが始められることを感謝いたします。神学校での寮生活では、学生の内で風邪が流行ることも少なくありません。新年度も続けて神学生の健康と主にある歩みのためにお祈りいただけたら幸いです。

「与えられた時を主のために」

2年課程2年
港北NTBBC
鹿毛（かげ） 喜悦（きえ）

主の御名を心から賛美致します。ハレルヤ！

母教会の先生方や兄姉をはじめ、諸教会の皆様のお祈りと具体的な形でのサポートを心から感謝致します。

イザヤ64：8「しかし、主よ。今、あなたは私たちの父です。私たちは粘土で、あなたは私たちの陶器師です。」入学直前、主の訓練やお取り扱いに対して恐れを覚えたことがありました。その時に与えられた御言葉です。愛に溢れた父であり、真実な陶器師であられる神様ご自身に全てを委ねる決心の確認、また徹底的に砕かれ、練られ、主に用いられる器へと造り変えて頂きたいという祈りが与えられました。そのような祈りから始まった神学校生活もあっという間に1年が経ちました。主が多くのお取り扱いを与えてくださったことを感謝致します。

寮生活、授業、実習を通して本当に多くの学びを頂きました。続けて新年度も知っても知っても知り尽くすことのできない神様のご愛をまた憐れみを日々新たに知る者となりたいです。神学を学ぶだけでなく、そこに生きる者となることができるように、また個人的なデボーションが祝福され、日々御前を誠実に歩むことができるようにお祈りください。卒業後の仕事や教会の働きについて御心を求めています。私に与えられた命の時間があとどれほど残されているかは分かりませんが、与えられている時を精一杯主のために生きていきたいです。

4年課程2年
佐倉BBC
齋藤（さいとう） 光彦（てるひこ）

「あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。」
Ⅰコリント12章31節

主の御名を賛美致します。

神様のあわれみと導きを感謝致します。諸教会の先生方、兄弟姉妹、神学校の先生方のお祈り、励ましを頂き感謝致します。学びの時を与えて下さることは喜びであり責任をおぼえます。

神様は私が考えている以上のことをなしてくださると思います。神様からのビジョンを祈り求めていきたいと思います。また、神様は最善を持って導いて下さっていることを信じて日々、学んでいこうと願っています。学びの中で今まで気づかなかったことを気づかせていただけるように。そして神様の御言葉を正しく理解していくことが出来るようになるために注意深く学んでいく必要をおぼえます。自分の考える判断は、あいまいなことがあるので正しく判断するためには、神様が導いて下さらなければ出来ないと思います。与えられた時の中で様々な事柄を通して神様に従っていくことを祈り求めつつ歩みを続けたいと思います。

2年課程2年
港北NTBBC
松田（まつだ） 綾乃（あやの）

敬愛いたします母教会、諸教会の先生方、兄姉のお祈りに心から感謝いたします。主の守りと導きにより、神学校1年目の学びを終えました。

「陶器師は、粘土で制作中の器を自分の手でこわし、再びそれを陶器師自身の気に入ったほかの器に作り替えた。」（エレミヤ書18：4）この御言葉は、神学校入学直前に示された御言葉でした。まさに、この1年間はこの

新年度にあたって

御言葉の通りに主が導いてくださいました。日々のデボーション、チャペルでのメッセージ、授業、寮生活、あらゆる機会を用いて、主は私自身を砕かれたように思います。何度も自分の罪、弱さ、足りなさが示され、自分自身に失望しました。しかし、それらはすべて、主にのみ拠り頼むためであり、自分自身ではなく主のご栄光があらわれるためであったことを教えられました。どこまでも罪深く、主の御働きにふさわしくないことを示されると同時に、自分に与えられているのは主の召ししかないということを確認し続ける歩みでした。ワーカーズコースのため、この２年目が神学校の最後の１年間となります。自分を召し出してくださった確かな主の御手によって、日々砕かれ、主御自身に用いやすい器に作り替えられていきたいと願っております。主の前にへりくだり、従順にお仕え出来るように、また終了後の働きのために与えられている青年伝道のビジョンがより具体的に導かれてまいりますよう、お祈りいただければ感謝です。

「多くの祝福と学びの中で」

４年課程３年
浅間BBC
香川（かがわ） 盛治（せいじ）

２年目の学びも、主から多くの祝福をいただくことができました。中でも、１年生の時から苦労して学んできたギリシャ語ですが、本文を訳す時、これまでの苦労は報われ、多くの祝福をいただきました。原典からピレモン書、Ⅱヨハネ、ユダ書の私訳をすることができたことは大きな恵みでした。

他にも多くの恵みをいただいた半面、多くの問題もまた与えられました。特に説教学では、説教とは何であるかというよりも、説教でないものは何であるかという問いがありました。「説教者の伝えたいことをみことばを通して伝えているならば、それは人間のお説教にすぎない。」という指摘がありました。神学生になり、何回か説教のご奉仕をする中で、「聖書のおことばが伝えたいことを、宣言できているのだろうか、それとも、自分の意見にすぎないのではないだろうか。」と大きな葛藤の中で祈りつつ、聖書のおことばに向かう日々となりました。

残り２年間で、主にあって成長できる学びをいただきたいと願います。

４年課程３年
高槻BBC
恋田（こいだ） 寛正（ひろまさ）

「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない。 すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。自分を見て賢いと思ってはならない、主を恐れて、悪を離れよ。そうすれば、あなたの身を健やかにし、あなたの骨に元気を与える。」箴言３：5-8

主の御名を賛美します。

尊い多くのお祈りとご支援を心より感謝申し上げます。

諸教会の先生方、兄弟姉妹のお支えにより、さらに１年間の学びと生活が祝福のうちに守られました。

体調不良により後期の伝道実習に受けられなかったのですが、夏休みに補講を受けさせて頂くことで２年生すべての科目を履修することができました。

自分の命は、自分のもののように考えていても実質は神さまのもの。すべては、神さまのご主権の中で秩序立てられています。どんなことがあっても、主に信頼して主のなされることを認める以外に、私は選択肢がありません。

新しい年度も主を信頼し、与えられた一日一日の学びと暮らしを精いっぱいさせて頂くことを祈っております。主に在りて、諸教会の皆さまのご安全と健やかな日々をお祈り致します。

新年度にあたって

4年課程4年
横浜BBC
香川（かがわ） 尚徳（たかのり）

主の尊い御名を賛美いたします。去る6月30日の卒業式において、3年間ともに学んだ3人の愛兄姉を送り出しました。自然に、ある思いが、起こされました。それは、私が、1年後、この先輩たちのように充実感を持って、卒業できるのかということでした。卒業論文をひとつとっても、情熱をもって向き合い続けることができるのか、最終的にどのようなかたちに仕上げることができるのか、今は、想像すらできません。最終学年となり、ご奉仕も学びもこれまで以上に増し加えられることでしょう。それは、大いなるお恵みです。しかし、その中で、必要とされる学びを統べ修め、卒業式を迎えることは、自分の経験や力だけでは、到底成し得ないことであると確信できます。この1年は、これまで以上に主に委ね、また、そのことを日々祈り求める1年となるでしょう。

低気圧が近づく毎に頭痛に悩まされる私にとって、平地より、10%以上気圧の下がる軽井沢での生活は、自分で思う以上に負荷がかかっている様子です。ですから、最終学年の1年間も、健康が支えられますように、主に全き委ねをもって歩めますように、そして、卒業後の働きの導きについて、お祈りいただけますと大変感謝です。

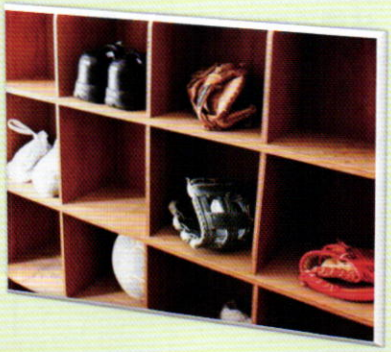
4年課程4年
カルバリの丘BBC
藤沢（ふじさわ） 幸人（ゆきと）

昨年度、4年ぶりに神学校の3学年に編入させていただくことができました。しかし、自分の足りなさを痛感させられた1年でした。同級生の香川尚徳兄はじめ、神学生の皆さん方にも随分ご迷惑をおかけしました。

さて、新年度を迎えて、神学校の学びと寮生活と通学の疲れにもやっと慣れて、神学校最後となる1年をどのように過ごそうかと、思いは今溢れています。

しかし私にとって大切なことは、一つ一つの授業に真剣に取り組むこと。卒業論文を書き上げること。若い神学生の皆さん方とまたとない良いお交わりの機会を持つこと。素晴らしい教師の先生方からできるだけ多くのことを吸収すること。そして何とか卒業に漕ぎ着けること。結局、平凡な抱負になってしまいます。

そして、多くの方々の祈りに支えられていると痛感しています。伝道者が留守であるという大きな犠牲を払い、なおかつ金銭的なサポートをもって送り出してくださっているカルバリの丘 BC の兄姉方の祈り、そして諸教会の兄姉方の祈りによって支えられております。そのことを忘れずに、1年を過ごしたいと思っています。



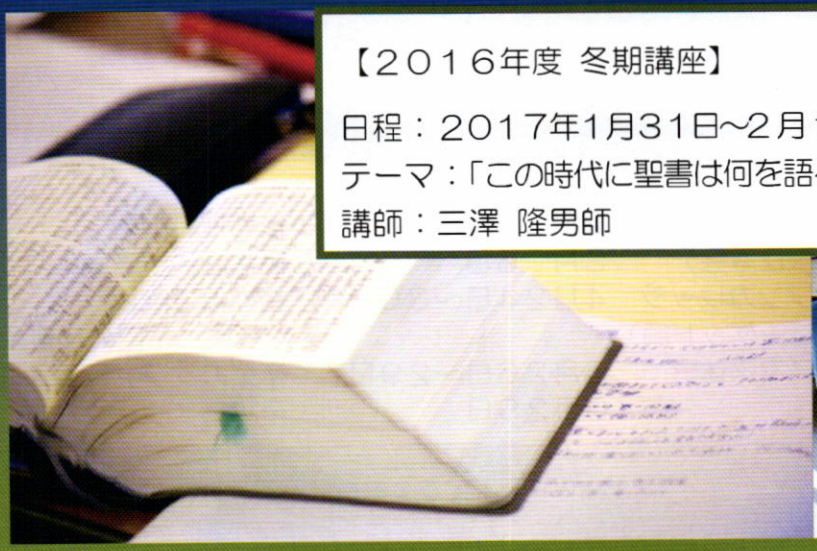
神学校2016年度報告

【２０１６年度前期伝道実習】

日程：２０１６年１０月１０日～１４日
　　１０月２５日、２６日
場所：野の花キャンプ・各奉仕教会

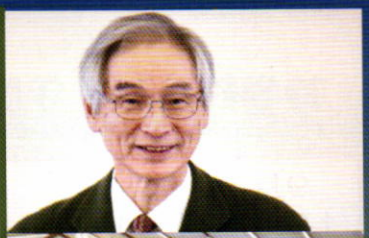
【２０１６年度オープンカレッジ】

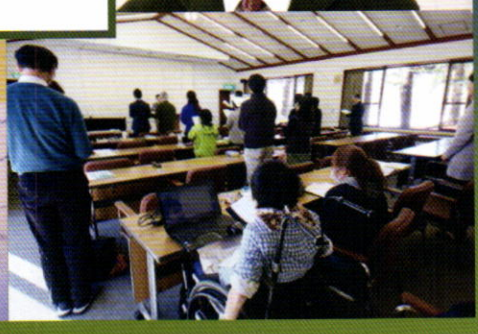
日程：２０１６年１０月２５日～２６日
テーマ：「宣教学特別講義」
講師：奥村　明郎師



【２０１６年度　冬期講座】

日程：２０１７年１月３１日～２月１日
テーマ：「この時代に聖書は何を語るか」
講師：三澤　隆男師



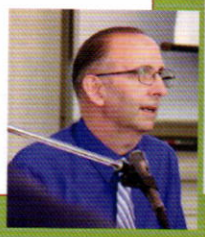


【２０１６年度 後期伝道実習】

日程：２０１７年4月２５～5月１日
場所：アガペーＢＢＣ

【２０１６年度卒業カンファレンス】
日程：　２０１７年6月29日、３０日
テーマ：「宣教師の視点から見た日本宣教」
講師：　マイケル・バーゲット師
　　アガペーＢＢＣ 牧師

【第 58 回卒業式】
日程：　２０１７年6月３０日
説教者：マイケル・バーゲット師



宮崎靖章兄・鈴木しのぶ姉・片山大輔兄

神学校 2017 年度予定

9月4日	入学式	（２０１７年）	
１０月１０日～１３日	前期伝道実習（於：各奉仕教会）	２月　９日	後期授業開始
		３月　６日	第１回入学考査
１０月２４日，２５日（宣教師論特別講義　マイケル・バーゲット師）	オープンカレッジ	４月２４日～３０日	後期伝道実習（於：希望の丘教会）
１２月１６日～１月８日	クリスマス休暇	６月２６日～２９日	卒業カンファレンス週
		６月２９日	卒業式

神学校だより 2016 年 9 月　　発行　日本バプテスト聖書神学校　　校長　石川 実
住所　長野県北佐久郡軽井沢町 4696-27　　ゆうちょ口座　00180－1－700102　　E-mail jbbf. jbbc@gmail. com